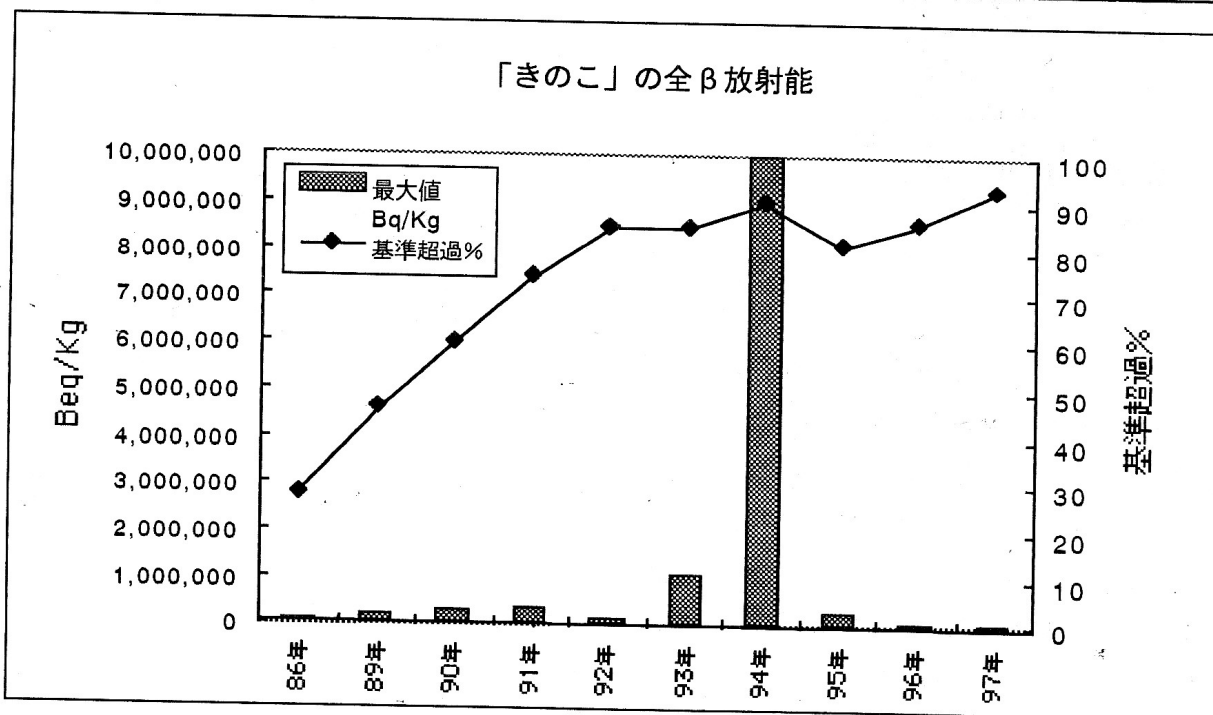


連載 13 ナロジチ地区の「きのこ」の放射能

項目	86年	89年	90年	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年
最大値Bq/Kg	59,200	145,040	271,950	330,410	107,300	1,036,000	9,990,000	277,500	32,190	44,400
基準超過%	28	46	60	74	85	85	90	81	86	93
測定検体数	32	219	380	269	153	不明	153	246	197	182



このデータを見て「うそだ!」と思う人もいるかも知れない。筆者もその一人である。チェルノブイリ事故から12年が過ぎ、放射能もそろそろ少なくなっていると多くの人が思っている。しかし、このデータを見ればそれが如何に甘い期待と幻想であるか思い知らされる。原発から70Kmのナロジチでは、放射能は未だに続く災難であるどころか、人々の大好きな「きのこ」の放射能は、事故直後よりもむしろ増大し続けて来たのである。ナロジチでは事故後、様々な食品を中心に毎年6000~8000件数の測定が続けられてきた。これはその膨大なデータのまとめの一部である。「きのこ」は元来放射能を蓄積する性質があり、他の物より高い値を示すことが多いが、それにしてもこのデータの最大値は信じがたいほど高い。しかも事故から8年経った1994年が最も汚染がひどく、その後は減衰傾向にあるが、基準を越えるものはむしろ増加している。今、ナロジチ地区の茸の90%は基準を越えている。「きのこ」の他にも、肉類やミルクなど、未だに放射能が基準を越える物は多数ある。86年から90年にかけて基準超過割合が少ないのは、そもそも基準値自体が高かったからである。念のために、現在のウクライナの食品放射能の基準をあげておこう。

()内数値は、前者がセシウム137、後者がストロンチウム90の基準である。

パン (20, 5) じゃがいも (60, 20) 野菜 (40, 20) 果物 (70, 10) 肉 (200, 20)
 魚 (150, 35) ミルク・乳製品 (100, 20) 卵 (6, 2) 飲料水 (2, 2)
 生いちご・茸 (500, 50) 乾燥いちご・きのこ (2500, 250) 薬草 (600, 200)
 特殊ミルク製品 (40, 5) その他 (600, 200)

(河田昌典)